

悲嘆の中で・・・

～「誠先生の分までみんなでがんばろう」～

去る1月30日(金)夜、本校の5年生担任の河野誠教諭が急逝されました。ご家族からの第一報を受け、信じることができず、茫然自失の状態でした。

今でもこのことを受け止めきれず、心の整理がつかない状況です。元気に「おはようございます。」と声が返ってくるようです。職員室の机は、花が供えられているものの、まだご本人が来るのではとの思いもあり、誰もがなかなか片づけられない状況です。私も職員もさることながら、特に受け持たれていた5年生の子どもたちの心は、察するに余りあります。

土曜日通夜、日曜日葬儀となり、明けた月曜日、子どもたちのことが心配で、教室を覗くと、「誠先生の分もみんなでがんばろう」と、子どもが黒板に書いています。この上ない悲しみのどん底にあっても、現実を受け止め、立ち上がろうとする子どもたちのこの言葉に込める思いを考えると、思わず涙が溢れました。

誠先生の子もたちのことをいつも第一に考え、自主性・自発性を大切に、生きて働く力を育てようと、誠実に取り組んでいる姿、職員室でも皆を和ませ明るく風通しのよい職場づくりに尽力して下さる姿等々、鮮明に脳裏に焼き付き、今でもこの現実を信じることができません。私は、ショックでこの通信を書こうとする意欲も出てきませんでした。

しかしながら、子どもの板書に記された言葉を目にした時、何としても立ち上がらねばと身を奮い立たせました。この子どもの言葉を、北杵築小全員心に刻んで、この深い悲しみの淵から這い上がり、なんとか立ち直りつつあるところです。

ある5年生の保護者の方から、コンビニの中で酒コーナーの前で立ち止まり、子どもが涙を流しているという話を伺いました。子どもたちの純真で、デリケートな心の安定も急がれます。

誠実でかけがえのない素晴らしい先生を失うという筆舌に尽くしがたい深い悲しみから、子ども・職員みんなで一刻も早く立ち直るよう心の安定を図りつつ、残された日々、誠先生の遺志を引き継いで、教育実践に邁進しているところ、気持ちを引き締め直しているところです。

どうぞ皆様、なお一層、温かく見守りくださればと存じます。

終わりにになりましたが、これまで河野誠教諭に賜りました皆様のご厚情に、改めまして深く感謝申し上げます。



「あまくておいしい！」～4年生お茶淹れ体験～

4年生は、2学期から杵築の特産品の一つである杵築茶について学習してきました。

1月22日(木)、北杵築でお茶農家を営んでいる手嶋優太さんと県農林水産部の米澤さんが来校してくださり、4年生に“お茶の淹れ方体験”を行っていただきました。これは、農林水産省「茶育」プロジェクトの一環で、子どもたちに日本の文化の一つであるお茶に親しんでもらうというものです。

教室でお茶の製法についてのお話を伺った後、家庭科室に移動し、いよいよお茶淹れ体験です。

まず、手嶋さんがお茶の淹れ方を実演しながら教えます。「お茶は、お湯の温度によって味が変わります。煎茶は90度前後がよいです。そして、「湯飲みにお湯を入れると、お湯の温度が10度くらい下がります」と、ポットから湯飲み茶碗にお湯を入れました。その後、お湯を、茶葉を入れた急須に移しかえました。1分経過後、「ここが大事です」と、3つの湯飲みにお茶を注ぎ分け始めました。「少しずつ順番に淹れて、3つ入れたら、逆の順番でまた3つに注ぎ分けて、味が均等になるように淹れます」。子どもたちは、手嶋さんが丁寧に入れる様子をじっと見つめています。手嶋さんが淹れたお茶は、どれも鮮やかな黄色の色をしています。

いよいよ、子どもたちが淹れる番です。2人と3人に分かれて協力しながらお茶を淹れてみます。

手嶋さんがしていたように、湯飲みにお湯を入れ冷まします。一方で、急須には教えてもらった小さじ2杯分の茶葉を、“これくらいいいのかな”というように、おそるおそる入れていきます。そして、湯飲みに入れていたお湯を、こぼさないように慎重に急須に入れ1分。手嶋さんのように、少しずつ丁寧に湯飲みにお茶を注ぎました。

さあ、実飲。どんな味だろうと少し不安げに口に含みます。「あまくておいしい!」「とろとろしている!」「最初あまくて、後味は渋みがある」。日頃の味とはまた違った味わいのようで、感動の表情。

その後、二煎目の淹れ方も教えてもらい、一煎目とは違ったすっきりした味わいも楽しみました。

この日の体験を通して、お湯の温度や抽出する時間によって味が変わるお茶の奥深さに気づくことができた貴重な体験となりました。

おうちに帰って、早速家族のためにお茶を淹れた子もいたようで、「おいしい!」と言ってもらったと、笑顔で教えてくれました。

